

旧山崎家住宅 調査報告書



1. 主屋 正面全景（南より）



2. 主屋 正面全景（南西より）



3. 主屋 表座敷及び広縁（南西より）



4. 主屋 小座敷（北東より）



5. 主屋 土間側小屋組（南東より）



6. 奥座敷棟 全景（西より）



7. 奥座敷及び廊下の内観（南東より）



8. 風呂・便所棟 全景（北西より）



9. 風呂・便所棟 洗面所及び風呂内観（東より）



10. 長屋門 全景（南より）



11. 東側堀及び米蔵（南東より）

棟札

安政三年

丙辰九月廿二日吉辰

六代

山崎万右衛門知盈

同 徳治郎

手代

辰藏

大工棟梁

大池村

版部惣助清成



仕手方大工

小左衛門

周

藏

音

吉

駒

吉

兼

吉

鹿

藏

千代

吉

左

吉

常

吉

彌石衛門

善

左衛門

寅

吉

12. 主屋棟札



13. 屋敷構え航空写真

序

掛川市は、国道一号線や東名、新東名の高速道路、そして東海道線や新幹線が通る交通の要衝です。江戸時代には掛川藩が置かれ、東海道筋には掛川城を中心に城下町が形成されました。城下には多くの人々が往来し、東西文化の交流豊かな宿場としても発展しました。

山崎家は、西町でろうそくや油を扱う商いで財を成して掛川藩の御用商人になり、藩の財政にも大きく寄与して苗字帯刀を許されました。六代目の時、現在の地に移り住んだと言われているとされています。

この屋敷内はもちろん、屋敷の周りにもたくさん松が植えられていて、遠くから望むとまるで松の岡のように見えることから「松ヶ岡」と呼ばれるようになったと、聞きます。

この山崎家からは、八代目「山崎千三郎」や、その甥「山崎寛次郎」など、多くの郷土の偉人を輩出しています。

平成二十四年、市外に住む山崎家から建物を取り壊す計画が上がり、保存を望む市民の声を受け、敷地建物を掛川市が買い取りました。しかし、今までに本格的な調査が行われていなかったため、不明な点が多く、文化財的価値を明らかにするための詳細な建造物調査が必要となりました。

この度、東京藝術大学大学院 美術研究科 文化財保存学専攻 保存修復建造物研究室に、歴史的建造物現況調査をお願いすることが出来ました。

調査は、上野教授をはじめ東京藝術大学のスタッフによって行われ、夏の真っ盛りには屋根裏へ入り、煤とびっしりの汗にまみれて下りてきた光景が印象に残っております。また、地元からは設計集団LNの皆様も調査に参画されたほか、庭園の調査には筑波大学の黒田先生、さらには、常葉大学の土屋教授から玉稿もいただきました。

こうして、多くの方々のお世話になりながら、松ヶ岡の調査報告書を刊行することが出来ましたのも、「以善堂」の精神による皆様の力を結集していただいた賜物だと思います。

今後は、市民みなさまのお力により、早急に松ヶ岡（旧山崎家住宅）を修復して永く保存し、広く公開と活用をしていきたいと思えます。

最後になりましたが、この事業に携わった多くの方々に感謝の意を記して、序文といたします。今後とも、「松ヶ岡」をよろしくお願い申し上げます。

平成二十七年三月吉日

掛川市教育委員会

教育長

浅井 正人

旧山崎家住宅 調査報告書

目次

口絵写真	
序文	
目次	
図版目次	
例言・凡例	
第一章 調査の概要	1
一〇一 位置と歴史環境	1
一〇二 調査の概要	4
第二章 山崎家の沿革と現状の屋敷構え	7
二〇一 近世における山崎家	7
二〇二 近代の山崎家	7
二〇三 現状の屋敷地と庭園	12
第三章 旧山崎家住宅の解説	17
三〇一 建造物の現状	17
三〇二 史料から見る山崎家屋敷の変遷	29
三〇三 痕跡から見る主屋の変遷	34

第四章 旧山崎家住宅の特徴

四〇一 大規模民家としての旧山崎家住宅の位置づけ	37
四〇二 遠州地方における近代和風住宅の展開と旧山崎家住宅	43
四〇三 旧山崎家住宅の庭園の特徴	50

第五章 総括 旧山崎家住宅の評価

五〇一 旧山崎家の歴史と屋敷構え	51
五〇二 各建物の概要と建築年代	52
五〇三 旧山崎家住宅の建築的特徴と価値	54

資料編	55
-----	----

写真編	56
-----	----

図面編	74
-----	----

図版目次

口絵 1	主屋 正面全景(南より)	図 3 - 2	取次から表座敷を望む	図 3 - 27	中門架構(北より)
口絵 2	主屋 正面全景(南西より)	図 3 - 3	西側広縁(北を望む)	図 3 - 28	米蔵北側室内(南より)
口絵 3	主屋 表座敷及び広縁(南西より)	図 3 - 4	小座敷から見る広縁	図 3 - 29	米蔵南側室内(北より)
口絵 4	主屋 小座敷(北東より)	図 3 - 5	茶の間(東面)	図 3 - 30	納屋南側室内小屋組み(南より)
口絵 5	主屋 土間側小屋組(南東より)	図 3 - 6	八畳・仏間・茶の間(南より)	図 3 - 31	納屋附属部分(西より)
口絵 6	奥座敷棟 全景(西より)	図 3 - 7	仏間(西面)	図 3 - 32	奥蔵室内(南西より)
口絵 7	奥座敷及び廊下の内観(南東より)	図 3 - 8	新座敷(南より)	図 3 - 33	西蔵北側室内二階(北より)
口絵 8	風呂・便所棟 全景(北西より)	図 3 - 9	二階(東より)	図 3 - 34	北蔵一階室内(東より)
口絵 9	風呂・便所棟洗面所及び風呂内観(東より)	図 3 - 10	正面土間側の縁(東より)	図 3 - 35	味噌蔵東側室内(南より)
口絵 10	長屋門 全景(南より)	図 3 - 11	台所(北西より)	図 3 - 36	金庫蔵外観(南より)
口絵 11	東側堀及び米蔵(南東より)	図 3 - 12	奥座敷棟、二階屋、風呂・便所棟室名	図 3 - 37	金庫蔵室内床タイル(南より)
口絵 12	主屋棟札	図 3 - 13	奥座敷 床詳細図(作図:設計集団LN)	図 3 - 38	掛川行在所平面図(静岡縣史跡名勝天然記念物調査報告書(特輯號)第十一集明治天皇聖蹟)
口絵 13	屋敷構え航空写真	図 3 - 14	奥座敷 座敷飾り(南西より)	図 3 - 39	居宅ノ図(掛川市蔵)
図 1 - 1	旧山崎家住宅の位置図	図 3 - 15	奥座敷棟基礎下の煉瓦積み(北西より)	図 3 - 40	掛川城縄張図 部分(掛川城復元調査報告書)
図 1 - 2	御巡幸御道筋絵図(部分) <small>静岡県立図書館蔵</small>	図 3 - 16	八畳間(東より)	図 3 - 41	史跡指定時の図面(史蹟調査報告書 第八輯 明治天皇聖蹟)
図 1 - 3	掛川城絵図 掛川市蔵	図 3 - 17	二階座敷(東より)	図 3 - 42	主屋痕跡図
図 1 - 4	掛川城御殿古図 個人蔵	図 3 - 18	渡り廊下の蒲鉾天井(北より)	図 3 - 43	主屋復原図
図 2 - 1	行在所としての山崎家の室名(推定)	図 3 - 19	一階梁組	図 4 - 1	中村家住宅家相図(雄踏町教育委員会蔵)
図 2 - 2	旧山崎家住宅配置図(現況)	図 3 - 20	四畳半から洗面を望む	図 4 - 2	黒田家住宅 絵図(家相図)
図 2 - 3	主庭の沓脱石と飛び石	図 3 - 21	風呂・便所棟の小屋組み	図 4 - 3	黒田代官屋敷資料館所蔵)
図 2 - 4	主屋北西の庭の沓脱ぎ石と藪こぼし	図 3 - 22	長屋門々口見返し(南より)	図 4 - 3	大鐘家住宅 銅版画(博覧図)
図 2 - 5	奥座敷棟西側の庭	図 3 - 23	長屋門小屋組み(東より)		(大鐘家蔵)
図 2 - 6	旧山崎家住宅庭園配置図	図 3 - 24	中門(南東より)		
図 3 - 1	主屋室名	図 3 - 25			
		図 3 - 26			

例言

一 本報告書は、静岡県掛川市南西郷に所在する旧山崎家住宅の建築群について、その文化財価値をさまざまな角度から明確にすることを目的としたものである。

二 調査研究は、東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻の保存修復建造物研究室が掛川市からの委託を受けて、平成二五年度の単年度で実施した。以下に調査関係者を列記する。

調査研究実施

東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻 保存修復建造物研究室
教授 上野勝久
非常勤講師 小林直弘
教育研究助手 猪狩優介
大学院生 植松みさと、小柏典華、鳥当千恵
調査協力者
常葉大学造形学部 准教授 土屋和男
筑波大学大学院世界遺産専攻 准教授 黒田乃生
筑波大学大学院世界遺産専攻 大学院生 井上美優、大給友樹
設計集団LN 鈴木庄一、山下晋一、村松謙一、倉田布美江、花村仁史、小林祐仁
小野吉彦建築写真事務所 小野吉彦

三 口絵写真と現況写真は小野吉彦建築写真事務所の小野吉彦氏が撮影したものである。古絵図類・古写真は所蔵者の同意を得て、各機関から提供されたものである。なお、本文中に使用した写真・図版は、特記のない限り各調査員が撮影・作成したものである。

四 本報告書の執筆担当は次とおりである。

編集・監修

上野勝久、小林直弘

第一～二章第三節(一)

小林直弘

第二章第三節(二)

黒田乃生

第三章

小林直弘

第四章 第一節

小林直弘

第二節

土屋和男

第三節

黒田乃生

第五章

小林直弘

挿図・図版作成

小林直弘、猪狩優介

古写真調整

小林直弘

凡例

一 報告書の本文中に掲載した図面・表は、特記のない限り本調査において作成したものである。ただし、図面の一部は、設計集団LNが作成したものを利用したが、若干の調整を加えた。

二 本文中の寸法表示は原則としてメートル法とした。ただし必要に応じて尺貫法も併用した。

三 史料は原文のまま掲載したが、適宜漢字は新字体に、異字、俗字、略字等は正字に改めたものもある。

四 注や参考文献については、必要に応じて適宜、各節の末尾に掲載した。

五 年代表記は和年号を基本とし、必要に応じて括弧内に西暦年号を記した。

第一章 調査の概要

一 位置と歴史環境

位置 掛川市は、静岡県西部の牧之原台地の西側に位置し、遠州地方に属する。近世における当地域は、北を掛川藩、南を横須賀藩が統治した。現在では西に袋井市、北に森町、島田市、東に菊川市、御前崎市が隣接し、南は遠州灘に面する。平成一七年に大東町、大須賀町と合併し、現在の市域となり、東西に約一六km、南北に約三〇kmで二六五・六三kmの広さである。北方八高山、東方には粟ヶ岳、西方に小笠山が接し、中央には、粟ヶ岳に源とする太田川水系で二級河川の逆川（さかがわ）が流れる。逆川は、古くは「懸川」もしくは「崖川」とも呼ばれ掛川市の名称の由来とされる。



図 1-1 旧山崎家住宅の位置図

旧山崎家住宅が所在する掛川市南西郷は、市域のほぼ中央に位置し掛川城の西へ約五〇〇m、JR掛川駅から北西へ約六〇〇mである。敷地は南を正面とし、南方には旧東海道である静岡県道三七号掛川浜岡線が通り、半町ほど北へ入りこんだ位置に立地する。北方は逆川、東方は新知川に挟まれ、敷地の北方で両河川は合流する。逆川は東から西にかけて流れ、新知川は、南から北に向けて流れる。北に向けて緩やかに降る傾斜はあるものの、起伏がほとんどない平坦な地形である。なお、南西郷は掛川市内に飛び地として所在し、当該地区周辺及びJR掛川駅周辺、東名高速道路南辺の掛川花鳥園付近にもある。

歴史的環境 掛川市で最古の遺物は、旧石器時代の石器が発掘され、縄文期の遺跡である萩ノ段遺跡からは、土器が発掘され、古くから生活の場となっていたことが分かる。古代の掛川市中心部は、遠江国佐野郡に位置し、佐野郡家により統治され、平安末期には原氏による原田荘が経営された。その後、鎌倉期には武家の台頭により中遠武士団が成立し、今川家が躍進する。

中世を経て、桃山期から近世にかけての動乱期を迎える。市中は今川氏による支配がなされ、今川氏の重臣である朝比奈氏による統治が大きな転換点を持つ。朝比奈泰濃は、文明年間の初期に今川氏の命により「懸川城」を築き、旧東海道筋を中心に城下を整備した。朝比奈氏により築城された懸川城を掛川古城と称する。掛川古城は、現掛川城の北東方向に五〇〇mの天王山に位置し、現在は龍華院が建つ。その後、今川氏の勢力により、古城では手狭になり、永正九年から十年頃に、現在の龍頭山に新たに築城された。今川の支配は

永祿十一年（一五六八）に徳川家康との攻防により終止符を打ち、掛川城主に徳川氏家臣の石川家成が入り、掛川は御領分となる。その後天正一八年（一五九〇）には豊臣家家臣の山内一豊による統治が始まり新たな時代を迎える。その際の石高は、五万一千石（後に五万九千石）であった。一豊は掛川城の大幅な拡張整備を進め、天主の建設、城郭構造の整備、そして城下町の整備も執り行った。

豊臣政権の陰りが見え始めた慶長五年（一六〇〇）に一豊が転封により土佐に移され、松平定勝が入封した。その後の掛川藩は徳川家の譜代大名の領地として栄えた。江戸時代前期には松平家をはじめとし、安藤家、朝倉家、青山家、本多家、北条家、小笠原家、などが短期間で移封が繰り返された。江戸時代中期は、井伊家、松平家、小笠原家、を経て延享三年（一七四六）に太田資俊（領地は五万石余）が上野国館林藩より着任する。太田家による統治が七代続き、太田資美の代になって明治時代を迎える。

資美が慶応四年（一八六八）に上総国芝山藩に移ることで掛川藩は廃藩となる。明治維新により一時駿府藩に編入されるが、明治四年の廃藩置県により静岡県に属する事となる。明治二年の町村制導入により、掛川宿、下俣町、十九首町、仁藤村及び大池村、葛川村、結縁寺村の一部が合併し佐野郡掛川町となる。同年には山崎家が大きくかかわった、国鉄東海道線の掛川駅が開業した。その後は、周辺の各村などの編入を行い、昭和二九年に掛川市となり、さらに平成一七年に大東町、大須賀町との合併に至り現在の市域となる。

掛川宿 豊臣政権時の山内一豊による城郭整備に伴い、掛川城下は宿場町として栄えることとなる。東海道五十三次の二六番目にあた

り、東は日坂宿、西に袋井宿が続く。成立時の町は、新町、木町（後に喜町）仁藤町、連尺町（後に連雀町）、中町、西町（のちに十王を含む）下俣町、十九首町、塩町、肴町、紺屋町、研屋町、瓦町の三街区に分かれ本陣は連尺町に置き、東の木町、西の新知川に番所を置いた。太田資順が文化二年（一八〇五）に編纂を命じた「掛川誌稿」により江戸後期の掛川宿の様子をうかがえる。資料によると山崎家が所在する西町は一六一戸有ったとされる。藩領内の主な産業は山崎家などが取り扱った葛布、現在も特産品である茶を山手側で生産する。



図 1-2 御巡幸御道筋絵図（部分）

安政東海地震 嘉永七年一月四日（安政元年、一八五四年一二月

二三日）に安政東海地震が発生した。遠州灘を震源とした推定M8.4の未曾有の大災害であった。地震による被害は城郭及び城下に広がり、本丸腰曲輪天主下石垣の崩落、天主の半壊、櫓・門等損壊が多数あり甚大であった。城下の様子は、掛川誌稿では「本州大地震にて掛川の駅家一字残らず転倒し、城中も多く破損す、（以下略）」とあり、また別の史料（役儀歴代）でも、家屋など七百棟程度の焼失し大きな被害がでたことが記録される。これらの被害状況や復旧の様子を掛川藩により、「遠江国掛川城地震之節損所之覚」¹⁾（以下掛川城絵図とする）として安政二年に幕府に報告された。絵図には破損度合いにより修復もしくは取り壊しと分けて実施した旨が記された。櫓、門などの建造物は復旧されたが、天主は基礎である石垣からの破損であり再建はかなわなかった。

地震後に復旧され現在まで残る建造物に二の丸御殿（重要文化財）がある。桁行約四四m、梁間二五・六mで、木造、一重、棧瓦葺の建物である。建築年代は棟札²⁾から、震災後わずか一年後の安政二年一月に上棟したことが分かる。大工は土屋五四郎、藤原良房が行った。なお、二の丸御殿は、文久元年（一八六一）に概ね現在の平面規模まで完成するが、安政二年時に上棟した範囲は、玄関及び書院などの一部である。現存していないが大手門の旧棟札からは安政五年夏の着工、城中番所は安政六年竣工等、この様に、城郭は、震災後すぐに復興の計画がなされた。また御殿同様に、藩は城下の復興に取り掛かっている。なお、城中の復旧状況は文久二年に改めて「震災付御城中御普請々所書付」として報告される。

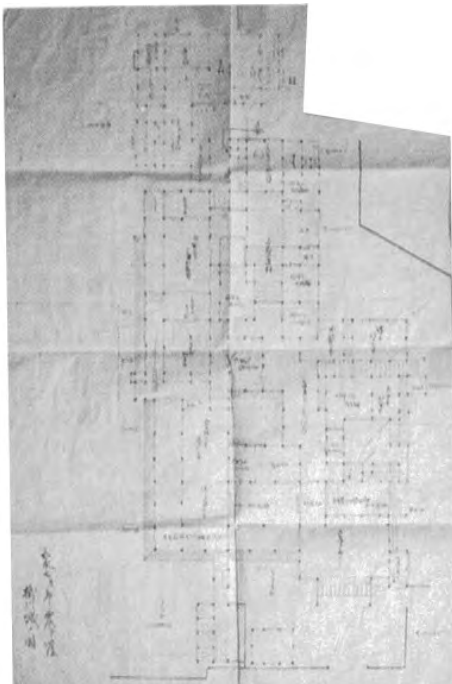


図 1-4 掛川城御殿古図

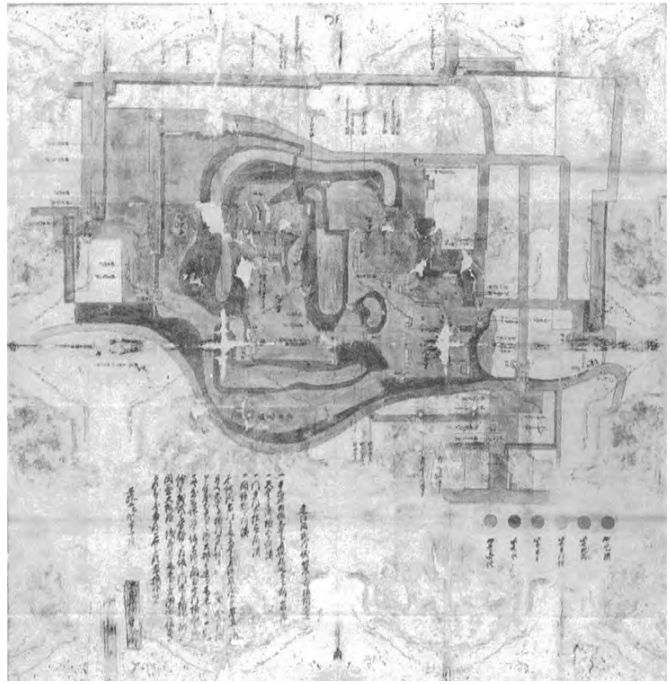


図 1-3 掛川城絵図

一―二 調査の概要

調査の背景と目的 山崎家は、江戸時代後期に掛川藩の御用商人として名をはせ、家業は油・葛布問屋を営んでいた。また明治一年の明治天皇御行幸の際、行在所として使用され、建物を含め史蹟名勝天然記念物保存法より聖蹟として指定されていた。山崎家は明治天皇の行在所として使用されたほど格が高く、また江戸末期の屋敷構えをよく残した住宅として歴史的価値を有する。

近年、建物および敷地に関して、市民からの保存要請を受け、平成二四年に掛川市が購入の方針を決定し、平成二五年一月に建物および敷地の引き渡し式が行われ、今後の保存と活用が望まれている。そこで、掛川市は、建物の使用の検討するために、平成二五年度事業として、建造物の調査研究を委託する事とした。東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻の保存修復建造物研究室では文化財建造物の保存やこうした調査研究の実績があることから、掛川市からの依頼を受けて受託した。

山崎家及び旧山崎家住宅に関する既往研究は次の通りである。

・山崎家 『掛川市史』に詳しく、建物に関する記述はないが、近世、近代の業績が掲載される。

・旧山崎家住宅 昭和初期の聖跡指定時に報告として昭和一〇年、文部省発行の『史蹟調査報告第八輯 明治天皇聖蹟』が建物調査としては最初となる。近年『静岡県近代和風建築』に取り上げられるなど、注目されてはいるが、本格的な調査は実施されていない。また、常葉大学土屋和男氏による「近代和風住宅を通じた景勝地の形成に関する史的研究」に取り上げられている。また、「掛川市歴史

的建造物調査報告書長屋門（平成一五年）」では、山崎家長屋門が取り上げられる

この調査研究では、これまでの成果を踏まえつつ、旧山崎家住宅の建造物を精査し、旧山崎家住宅を他の近世建築や近代和風建築などの類例との比較考察を行い、文化的価値を考察する事とした。今後、旧山崎家住宅全体の保存方針、地域活性化に必要な措置など検討するための基礎資料としたい。

体制と経過 東京芸術大学では、屋敷に所在する建造物群の史料・構造形式・細部架構等の調査を実施した。それ等の日程・調査員・調査内容は以下の通りである。

□第一回調査 五月一日（一日間）

事前調整、建造物実測調査

上野勝久、小林直弘

□第二回調査 六月一〇日（一日間）

実測調査

上野勝久、小林直弘

□第三回調査 七月二三日（一日間）

実測調査

小林直弘、猪狩優介

□第四回調査 八月二一日～二三日（三日間）

実測調査

東京芸術大学

上野勝久、小林直弘、猪狩優介、植松みさと、小柏典華

設計衆団LN

鈴木庄一、山下晋一、村松謙一、倉田布美江、花村仁史、

小林祐仁

□第五回調査 九月一四日（一日間）

検討委員会、史料調査

小林直弘

□第六回調査 一〇月二九日～三一日（三日間）

細部調査、実測調査

上野勝久、小林直弘、猪狩優介

□第七回調査 十一月三日～一四日（二日間）

庭園調査

筑波大学

黒田乃生、井上美優、大給友樹

東京藝術大学

小林直弘

□第八回調査 二月二六日～二七日（二日間）

類例調査

上野勝久、小林直弘、猪狩優介、植松みさと

□第九回調査 三月一七日～二〇日（四日間）

細部調査、写真撮影調査

上野勝久、小林直弘、猪狩優介、鳥当千恵

小野吉彦

今回の調査は、先行研究を実施した常葉大学造形学部造形学科の土屋和男氏に旧山崎家の近代における調査研究を、屋敷地の庭園などの調査は、筑波大学大学院人間総合科学研究科世界文化遺産専攻

の黒田乃生氏の協力を得た。また、屋敷地には、多くの建造物があることから、実測調査にあたり掛川市の歴史的建造物の調査等を行っている「設計衆団LN」に建造物実測の一部を依頼した。また口絵写真と現況写真は小野吉彦建築写真事務所の小野吉彦氏に依頼した。調査員の構成は次の通りである。

□調査員

東京藝術大学大学院美術研究科 文化財保存学専攻

教授 上野勝久

非常勤講師 小林直弘

教育研究助手 猪狩優介

博士課程 植松みさと

修士課程 小柏典華、鳥当千恵

□調査協力者

常葉大学造形学部造形学科

准教授 土屋和男

筑波大学大学院人間総合科学研究科 世界遺産専攻

准教授 黒田乃生

修士課程 井上美優、大給友樹

設計衆団LN

鈴木庄一、山下晋一、村松謙一、倉田布美江、

花村仁史、小林祐仁

□写真撮影

小野吉彦建築写真事務所

小野吉彦（口絵写真・現況写真）

(一) なお、その後浜松県に所属するも、浜松県、静岡県の合併により、再度静岡県に属する事となる。

(二) 個人蔵絵図のほかに覚えがある。

遠江国掛川城地震之節損所之覚

一、本丸七曲輪天主下石垣折廻老ヶ所崩落

一、天主半潰、櫓五ヶ所潰

一、門多門共拾三ヶ所潰

一、囲塀数ヶ所潰

右絵図朱引之通天主下石垣崩落候付築直之儀且又天主井櫓門多門潰候付き以連々如元修復申付度尤天主之儀ハ大破ニ付追付取建候迄一先畳置取壊候跡ハ土塀ニ而囲置多門櫓向之内絵図掛紙之分暫之内仮之門建置櫓跡ハ柵ニ而囲置太鼓櫓之儀茂迫而取建候迄二階付之仮家ニ而差置申度奉存候

右段奉願候以上

太田撰津守

安政二年乙卯年七月

(三) 御殿の棟札は次の通りの文言が記載される。

〔表〕

遠江国掛川城安政元年甲寅十一月四月地大震

殿宇皆悉破碎仍

奉行

城主令小臣有□□而領中工匠交互来成其効

年寄

須貝三郎兵衛

小野□辯

安政二季乙卯冬十一月

橋爪弥右衛門

藤原正年

用人 国井平右衛門

源 □□

〔裏〕

賄役

和田 平太夫 平 貞久

賄役兼買物役

松山嘉左衛門 源 静則

勘定人

今井 貴作 源 正英

普請役

鈴木 郡平 源 立中
加藤 有平 藤原嘉績

元方普請役

袴田作右衛門 源 政芳
山崎又左衛門 源 改尚

大工棟梁

土屋 五四郎 藤原良房

第二章 山崎家の沿革と屋敷構え

山崎家は、江戸時代中期に万右衛門（才兵衛）を初代当主として家を興した。江戸時代後期には掛川藩の御用商人として名をはせ、掛川城下において、中町の松本家、木町（喜町）の鳥井家とともに、掛川の御三家と称された。山崎家は現在の当主で二一代を数え、歴代の当主の出生没年は、次の通りである。

初代	才兵衛Ⅱ万右衛門	生不明〜宝暦五年没
二代	山崎万右衛門	出生没年不明
三代	山崎万右衛門	出生没年不明
四代	山崎万右衛門（旭）	〜文政一一年没
五代	山崎万右衛門（義一）	文化四年頃〜文政一三年没
六代	山崎万右衛門（知盈）	文化七年生 慶応元・二年頃没
七代	山崎徳次郎	天保一一年生 明治三三年没
八代	山崎千三郎	安政二・三年生 明治二九年没
九代	山崎淳一郎	明治一六年生 大正二年没
一〇代	山崎健太郎	大正二年生 平成二〇年没
一一代	山崎良太郎	現当主 昭和一六年生 〳

ここでは、山崎家を近世、近代に分けて通観したい。また、それに合わせ、屋敷構えの変遷をみる。なお、山崎家の近世・近代における沿革は「掛川市史」に詳しく、ここでは、その要約につとめる。

二一一 近世における山崎家

初代万右衛門は、才兵衛と称し、伊達方村寺ヶ谷（現掛川市伊達方）の山崎家の二男として生れた。分家の後、油商として、油、蠟燭、雑貨などの販売を行っていた。当時の居住地は不明であるが、後に城下の西町に店舗を移転し、その際万右衛門と名乗り始めた。以後の当主は万右衛門を襲名することとなる。

二代、三代に関しては、出生等の直接的な史料は見つかっていないが、文化一〇年（一八一三）の「松ヶ岡文書（袴田銀藏氏『掛川城略年請未定稿』所収）」の「覚」によると「祖父以来御用向出精相勤候ニ付苗字御免被成下之以上」とあり二代万右衛門より御用達であった可能性がある。そしてこの時より山崎姓を名乗ることができたとされる。初代から四代旭にかけて油商を営んでいたが、五代目義一は、才右衛門に店を任せ、十王町高屋敷に新たに店を開き、葛布・油を取り扱った。義一は早世し、その弟である六代知盈が店を引き継ぎ、弘化年間に屋敷を西町から現立地の十王裏通称「瓦屋敷」に居宅を移したとされる。御用達のほか、新田開発や土地の取得など生業は多岐にわたり、掛川御三家の筆頭として名をはせた。山崎家は、安政四年一〇月の史料（松ヶ岡文書）によると、五人扶持から二五人扶持が与えられ、身分も御家来並右筆格の処遇であったとされる。

二一二 近代の山崎家

幕末の動乱期をへて、徳次郎は掛川藩の負債整理に参与し、御用

金の清算として、近隣の田畑、三方原、大井川上流、奥州奥山、伊豆天城山等の山林を買い入れ県下屈指の富豪となった。明治三年に徳次郎の城西への隠居に伴い八代として徳次郎の弟である千三郎が一五歳にして家督を継ぐこととなる。

近代の幕開けと共に山崎家の沿革を通観するために、千三郎の功績を見たい。その功績は、金融・財政基板の整備、生活基盤の整備、都市交通基盤の整備など多岐にわたる。また、明治一一年には、明治天皇による北陸東海両道御巡幸に際し、山崎家が行在所として使用された。

金融・財政基盤として、明治一一年に産業資金活用のため、貯蓄結社「掛川厚生社」を設立、翌年の明治一二年に岡田良一郎と共に「資産貸付所」の開設、明治一三年には後の静岡銀行の前身の一つとなる「掛川銀行」を掛川の松本家、鳥井家などと共に設立し筆頭株主となる。銀行の設立の主要な目的は、製茶販売に伴う荷為替金融である。そのため明治一四年には茶生産の基盤となる茶再生工場を横浜及び清水に建設した。

生活基盤整備として用水整備が挙げられる。明治二〇年に山崎徳次郎、千三郎、松本儀一郎、鳥井半次郎の四名の連名で、静岡県知事関口隆吉あてに「大井川疎水工事測量願」がだされた。その際千三郎は大井川用水の計画図を作成するなど中心的な役割を担った。翌年にはその願いがとおり「疎水測量記録」が開始され、事業に着手した。その記録を基にあらたに「大井河（マ）疎水工事計画書」が作成された。

都市交通基盤では、東海道鉄道の誘致に尽力した。明治一九年八月に「東海道鉄道線路之儀二付上申」として疎水同様に静岡県知事

関口隆吉へ提出した。提出と共に、静岡大務新聞に各有志として上申を掲載させた。これは、東海道鉄道が、焼津から海岸線を通る計画が持ち上がったことがきっかけであった。上申の結果明治二二年に東海道鉄道が開通し掛川駅が開業した。東海道鉄道の誘致に伴う動きは、「青田隧道工事組合」の組織、「掛川馬車鉄道」施設願の提出、「掛川鉄道株式会社創立願」など多岐にわたる。以上の様に金融・用水・交通など掛川の近代化の礎を築いた。このころの山崎家は県下屈指の財力をもつこととなる。

しかし明治二九年七月に千三郎は四二歳の若さで急逝し、九代目は弱冠一四歳の淳一郎が家督を襲うこととなる。淳一郎の後見人として、千三郎の甥である寛次郎が山崎家の財産管理などを担った。寛次郎は東京帝国大学で教鞭を揮った経済学者・法学者で、後に日本銀行顧問、金融学会初代理事会長などを歴任した。淳一郎も残念ながら大正二年に急逝し、十代目として息子である健太郎が家督をつぐ。健太郎は、生後四カ月であったため、淳一郎の弟である周五郎を後見人として成人するまで山崎家を切り盛りした。健太郎の代では、明治一一年の北陸東海両道御巡幸に際し行在所として使用された敷地の一部を昭和八年に史蹟として指定されることとなる。しかし、戦後昭和二三年六月に明治天皇関係史蹟（明治天皇聖蹟）は指定解除とされた。

第二次世界大戦を越え、昭和三一年には山崎家は拠点を東京に移し、縁があった近隣に居住していた横山家に屋敷の維持管理をまかせた。その後、平成に入り山崎家が屋敷及び敷地を売却の意向を示し、平成二四年に市が購入を決定し現在に至る。

行在所としての山崎家 明治天皇による北陸東海両道御巡幸は、明治十一年八月三〇日より、十一月九日まで執り行われた。供奉者は、大政官右大臣岩倉具視を筆頭に延べ六〇〇名におよんだ。巡幸に際し、山崎家は明治十一年十一月一日・二日を「掛川行在所」として使用された。当日の行程は次の通りである。

十一月一日 午前 八時 浜松行在所御発輦

午前一〇時 治河協力社御発

午前十一時 御小休

(見付町 元脇本陣大三川屋上村新八郎宅)

午後 一時 御小休

(井川村 一木喜三司邸)

午後 二時 御小休

(原川町 椎木家伊藤幸三郎宅)

午後 四時四〇分 掛川行在所御到着

十一月二日 午前八時 掛川行在所御発輦

行在所としての様子は、史料は次の通りである。

・「大日本報徳第三三六號」一九三〇年発行

山崎覚次郎氏による回顧録が記載される。

・「明治十一年御巡幸遠江聖蹟記稿」一九三六年発行

山崎常磐により当時の様子が記される。

・「明治十一年明治天皇北陸・東海道御巡幸掛川行在所のこと

続・掛川風俗史稿」一九六九年発行

郷土史家である中川長一氏が所蔵する「行幸先発官指示書」を取り上げ当時を振り返る。

史料『明治十一年御巡幸遠江聖蹟記稿』から、「山崎家邸内外當時の有様」から当時を見てみたい。

當時山崎家ノ門道ハ質素ノ家風ヲ守リ、極メテ狭ク辛ウジテ門前マデ人力車ヲ通ズルニ過ギズ、鹵薄ノ御馬車通シ難キ故門道ノ東方ヘ掛出シヲナシ、松ノ生木ヲ敷並ベ其上ヲ土ト砂利トニテ搗キ堅メ盛砂ヲ置イタ。十王町ヨリ入口ノ新知川西岸ノ石垣モ、其時山崎家ニテ栗石ヲ以築立タル由、又此時掛川町ニテモ西町ト十王町トノ境ナル西王橋カ改造シ、川筋堀替道路修繕石垣積マデ行ヒシト見エ、其費用中ヘ山崎家ヨリ金廿圓寄付ノ事同家記録ニ見ユ。

當時主家ハ一切明渡し、家族ハ北裏ノ倉庫ニ入りテ謹慎シテ居リ、御着ト御発輦ノ時ニハ東側ノ米倉ノ軒下ニ家族一同平伏シテ奉拝シタル由。(中略)

長屋門ノ地覆ガアルタメ、御馬車ノ通行致シ難キ故、之ヲ取除カントセシ、夫ニ及バズト先發官ノ命アリシ為ニ、當日至尊ハ門前ニテ御下車御徒歩ニテ入御アラセラレタトノ事デアル。

縣ノ役人ハ大迫縣令始メ一同西北ノ文庫倉デ事務ヲ執ラレタトノ事デアル。

現今ノ米倉ハ南ノ一部ヲ其後増築シタルモノナルガ當時ハ門ノ東ニ厩舎アリ、夫レヘ御馬車ノ馬匹ハ入レタトノ事デアルガ當御巡幸中ノ御料馬車ニ輪臣下馬舎一輪御物運搬馬車一輪馬匹四十二頭ト用度品記ニ載レル故、此厩舎ヘハ御馬車用ノ馬匹ノ一部ヲ収容シタルモノベシト推想サル。

表 2-1 行在所仕様時の室名の記録と覚書

記銘	記録	覚書
侍補	二階	次ノ間
近衛士官	四畳半	十畳
侍従	部屋	次ノ間
供進所	小座敷	納戸
出納課	茶ノ間	六畳
庶務課	茶ノ間	
宮内省	仏間	
大政官	仏間南	
内膳課	仲ノ間	茶ノ間・台所
調度課	門西	向店
内匠課	門西	向店
仕人	向店	店二階
御輿置所	前米倉	前倉
便所	茶ノ間北	
便所	座敷西	
便所	部屋西裏	
玉座	上ノ間	上ノ間
御次	次ノ間	
料理所	土間	台所
ㄨ切	六畳	六畳
県官詰所		中ノ間
内廷課		小座敷
侍医局		四畳半
御蔵課		向店

邸ノ東北隅ニアル井戸水（此井今ハ取毀テ無シ）ヲ御料ニ供シタガ、此井ニハ新ニ井桁ヲ作り、蓋ヲモ新調シ、嚴重ニ錠ヲ御シ、入用ニハ一々掛リ官ヨリ錠鍵ヲ受ケ来リテ水ヲ汲ミ上ゲ（以下略）

以上のように、東海道より山崎家の敷地へ向かう路地を整備し道幅を広げたこと、当日は主屋を明け渡し、山崎家の住民は背面の蔵にいたことが分かる。なお、行在所として使用に際し、御下賜品として、御紋付三ツ組木盃一組、紅白羽二重二疋、行在所御建札一本、および「御浴室御廁その他在来の家屋へ附着建設のものは悉皆戸主へ下し置きたり」として賜った。また、御泊として金七拾円、御立退物として、金一円貳二十五銭を賜った。

建物名および室名

現在の部屋名称は伝えられていない。そこで、「行幸先発官指示書」には、玉座の間のほか供奉者の宿泊もしくは滞在の室名が記される。この「行幸先発官指示書」は、中川氏が入手した二八枚の小型綴り本である。指示書には、「掛川ノ行在所記録」（中川蔵飯綴本一頁・以下記録）と綴り内での頁数は不明であるが白紙に書かれた室の使用表（以下覚書）がある。室の記録は仏間、上之間、土間、前米蔵など断定できる。指示書及び覚書をまとめたものが表二・一である。また、前記した「山崎家邸内外當時ノ有様」では、南の一部を増築した米倉、東に厩舎が接続した長屋門、西北にある文庫蔵、北裏の倉庫との記載がある。これらの情報を整理した物が次の図二・一である。

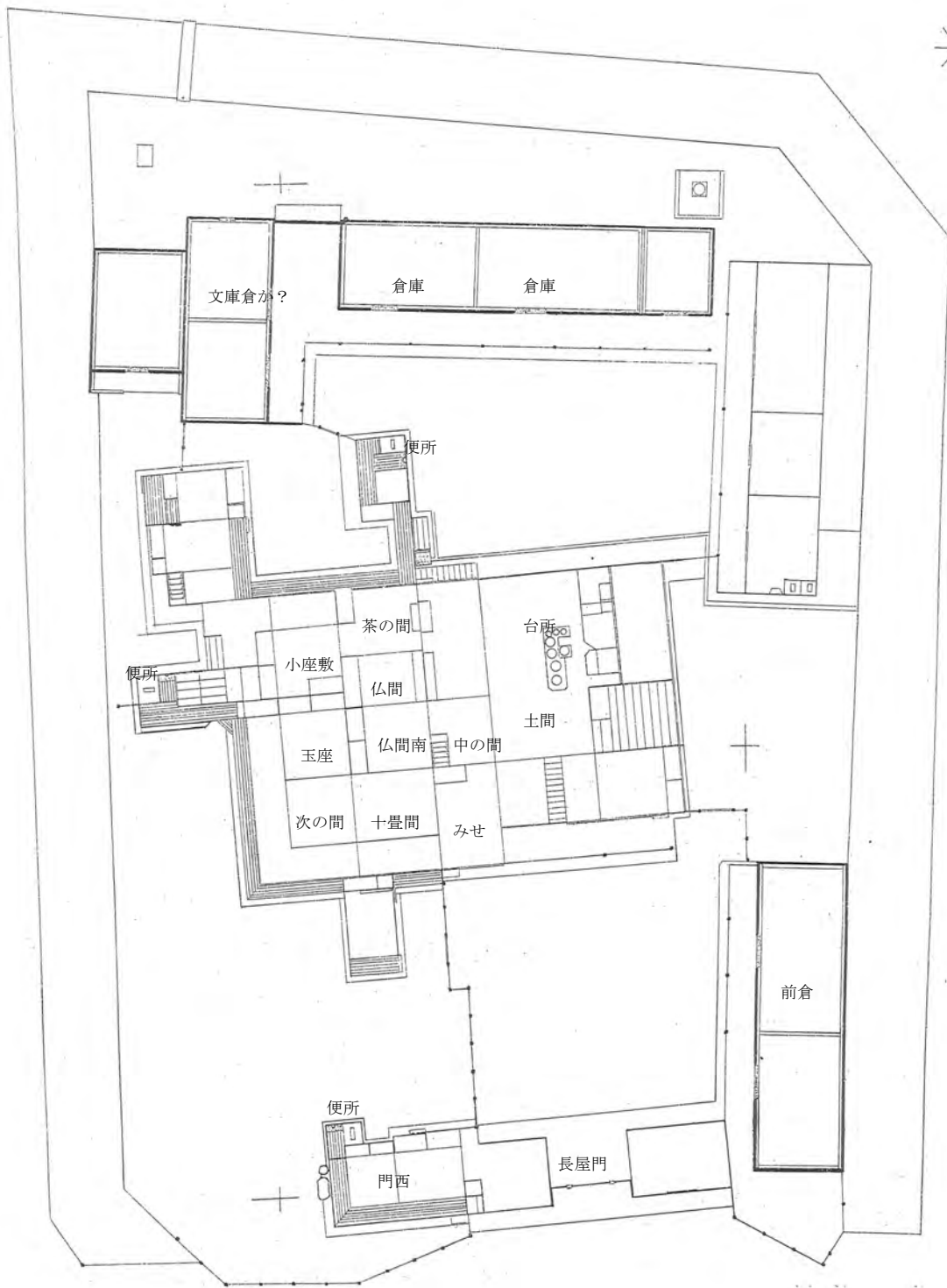


図 2-1 行在所としての山崎家の室名 (推定)

二一三 現状の屋敷地と庭園

(一) 屋敷地と家屋配置

屋敷地 旧東海道（現静岡県道三七号掛川浜岡線）から幅一間半ほどの小道を約五〇m北方に入った位置に所在し、南西郷八三八番ほか一筆から成る。南北約八五m、東西約八五mであり、面積は五三〇二・一六㎡（一六〇三・九坪）と广大で敷地内はほぼ平坦である。北方に逆川、東方に新知川が流れ、周囲は宅地が並ぶ。敷地には主屋をはじめ奥座敷棟、二階屋、風呂・便所棟、米蔵、西蔵、奥蔵など計一四棟がある。これら建物群はコの字型の堀に囲まれ、一部奥座敷のみ直上に造成される。敷地南西部分は庭となり、堀を挟んで広がる。主屋背面は裏庭があり、西蔵、北蔵、味噌蔵、納屋に囲まれる。なお、堀は現在空堀となっているが、当時は逆川から水を引き込んでいたとされる。

家屋配置 敷地のほぼ中央に主屋、南辺に長屋門を中心に建て、東に米蔵、西に主庭が広がる。長屋門東前方には、史蹟指定を記念した石碑が建つ。主屋には、北に新風呂・便所棟、西に風呂・便所棟、二階屋が付属し、その背面には、奥座敷棟が続く。主屋前面西側は主庭で、赤松や椎等の高木や中木、つつじなどの低木、燈籠などで飾られる。主庭の赤松は、旧山崎家が「松ヶ岡」と通称される所以の一つといわれ、主屋表座敷境の欄間彫刻の題材となっている。主屋背面側では、東辺に中央に納屋、北辺に味噌蔵、北蔵、西辺の北側に西蔵、奥蔵が並ぶ。西蔵北方には庭を設け、木塀で囲み、屋敷神を祭る祠が二基、北辺に裏門を作る。

逆川



図 2-2 旧山崎家住宅配置図（現況）

(一) 庭園の現況

概要 外部空間は主屋の南および西側に主庭があり、そのほかは奥座敷西側に面した芝庭がある。主屋の北は、池を配した庭、東および北側は裏庭となっている。式台の前にも植え込みがある。敷地の西側の堀は主庭に取り込まれている。敷地の北東角と、南西に樹高八から十mのスダジイがある。屋敷の名前の由来であるアカマツは主庭にのみ見られる。

式台前 長屋門から入ると西に塀と中門がある。中門を入ると玄関へ直角に切り石が敷かれている。また、その切り石から主庭へは板塀を介して丸みをおびた飛び石が据えられている。「真行草」で見ると、式台へのアプローチは「真」、庭に向かう動線は「草」と、意匠を分ける事で空間の性格の違いをあらわしている。玄関正面には小ぶりの春日燈籠があり、西に景石が据えられ、東にはドウダンツツジが植えられている。ドウダンツツジは燈籠を超える大きさに成長している。

主庭 飛び石を配した庭園である。最も大きな特徴はアカマツが主要木であること、堀が庭園に取り込まれていることである。表座敷の南側と西側に据えられた沓脱ぎ石はいずれも大振りの鞍馬石(座敷南一四〇〇×一三〇〇mm、座敷西一六〇〇×一二〇〇mm)である。庭の中央には池がある。池の縁は模様に入った石が組まれている。池の中にも景石が置かれている。飛び石はふたつの沓脱ぎ石と中門から庭への入り口を繋ぐように打たれている(図二二三)。飛

び石は鞍馬石が主と考えられ、新鞍馬石の可能性もある。庭の中央には三〇〇〇×一四〇〇mmの大きな踏み石が据えられ、そこから短冊寄せ敷きの延段が南に向かつて配されている。飛び石のアクセントとして、建物の礎石を転用したもの、板状の石(根府川石と思われる)、大理石のような白い石が配されている。昭和十二年、静岡県発行の『静岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告(特輯號)第十一集 明治天皇聖蹟』に所収されている「掛川行在所平面図」(図三一八)には、長屋門西側に部屋が設けられており、写真を見ると、延段の先に竹垣がしつらえてある。現在、竹垣はなく、延段は堀を渡る飛び石に繋がっている。燈籠は春日燈籠が三基で、高さ三mの大きなものが池の南西に一基、座敷北西の手水鉢と庭中央の延べ段の脇に高さ一・六mのものが据えられている。表座敷の南東の躊躇横の燈籠は竿に凹凸があり笠は丸みを帯び、他と異なっている。昭和十二年の写真には池のそばに雪見燈籠があるが、現在は同じ位置にはなく、奥座敷の庭に移設されたと考えられる。主庭につくばいは二箇所あり座敷西北のものは六角形の整形された手水鉢、座敷南側のものは自然石の手水鉢である。高木はアカマツ、スダジイ、モッコク、イロハモミジなどがあり、低木はアセビ、クチナシ、ドウダンツツジなど花を觀賞する樹種が植えられている。前述の調査報告の写真を見ると、高木はマツが主でツツジの刈り込みとクマザサが植えられている。現在は低木が成長しクマザサは座敷から見て池の手前にあつたものが、南西の奥に移っている。

堀には現在は水がなく、橋が一箇所架けられている。「掛川行在所平面図」では敷地が堀に囲まれているため、堀の西側部分はその後新しく作られたと考えられる。堀の西側は飛び石が奥座敷棟に向

かつて打たれており、堀の端に植えられた広葉樹と塀の際に植えられた針葉樹の間を歩く山道の風情がある。燈籠は四基あり、雪見燈籠と思われるものが二基、置燈籠と春日燈籠がそれぞれ一基ずつあるが、欠けている部分があり完全ではない。地震で崩壊したのち、復旧できていないとのことである。また、堀に近いところに石が多数あるが、これも雑然と置かれており、造られた当初のかたちは不明である。珍しいものとして、奥座敷棟に近いところに化石が表面を覆った石が置かれている。高木は幹の直径が八〇〇mmを超えるスダジイがあるほか、スギ、シラカシなどがある。スギ以外は植えられたものか、こぼれ種から成長したものかは不明である。堀の近くにはイロハモミジ、サルスベリなどが植えられている。

奥座敷棟西側の庭 奥座敷棟の増築にともなって作られた、芝生に飛び石が配された明るい庭である(図二二四)。奥座敷棟の西側は鞍馬石(一八〇〇×七〇〇mm)、南側は御影石(九五〇×九五〇mm)の方形の沓脱ぎ石がある。犬走りの縁石も御影石である。奥座敷棟の北西には円形の立手水鉢があり、周囲に石組みがあり、西に燈籠がある。燈籠は丸みを帯びた形で、基礎、竿、中台まであるが、火袋より上部は地面に置かれている。中央部、座敷から西に見える位置には棗型の手水鉢(高さ六〇〇mm)、西側の脇に風化した加工を施された生込み燈籠(高さ一七〇〇mm)が景を造っている。南側には雪見燈籠がある。それぞれの燈籠に向かって飛び石が千鳥打ちに配されており、交差するところに置かれた直径六六〇mmの丸い石がアクセントになっている。高木は北にイヌマキ、クロマツの

ほか、ウメ、ツバキなどの花木、中低木はアオキ、キヤラボクなどが根締めとして植栽されている。

主屋北西の庭 約七m四方の小さな庭である。裏庭とは木柵で仕切られている。中央に三三〇〇×二三〇〇mmの方形の池がある。明治初期と思われる絵図(掛川市蔵資料・年代不詳・図三二九)には同じ位置に不整形な池が画かれているため、池と庭は当初からあったと考えられる。現在は池の縁の東側のみ自然石で、そのほかはコンクリートである。このコンクリートの池の縁が当初のものかは不明である。北に方形の御影石の沓脱ぎ石(一二五〇×五〇〇mm)があり、鞍馬石のおおぶりの踏石に霰こぼしの延段が配されている(図二二五)。南東の角には直径七〇〇mmの御影石の水盤が置かれている。池の周囲にはサツキツツジ、ドウダンツツジ、ナンテン、ハイビヤクシン、ギボウシなど彩りのある低木が植えられており、沓脱ぎ石の周りは苔、延段の東側はリュウノヒゲなどの地被が見られる。

東および北側の裏庭 サービスヤードとして使用されている。

東側の敷地境界はトタンの笠木を付けた板塀が設けられている。米蔵の北にはカキが、納屋の南にはスイセンとアジサイが植えられている。納屋の南と東はコンクリートで舗装されている。

主屋の北庭は南北と西側に二列に配した切石が直線上に敷かれ、蔵と主屋を繋いでいる。蔵の基礎にも使用されているこれらの切石はやわらかい伊豆石と思われる。蔵の軒下はコンクリートで舗装され、同じ切石の縁石が巡っている。記録では明治天皇の巡幸のため



図 2-3 主庭の沓脱石と飛び石



図 2-4 主屋北西の庭の沓脱ぎ石と霰こぼし



図 2-5 奥座敷棟西側の庭

に、屋敷地の東北角にある井戸の井桁を新しくしたが、その後取り壊したことが記されている（山崎常磐「明治十一年御巡幸遠江聖蹟記稿」）が、現在は蔵が建っており痕跡は確認できない。風呂の北には水道が設置され、東側には四〇〇×六五〇mmの沓脱ぎ石が置かれている。

中央には畑があり、調査時点（一一月）にはダイコン、ネギが作られていた。高さ一・五mから三mのカキが六本植えられている。聞き取りによると二階屋の北にあるカキは昭和中期にはあったが、その他は後に植えたものであるという。地被は芝生で、北東の一部はリュウノヒゲである。北東角には高さ十二mのスダジイの大木があり、こぼれ種で周辺にスダジイの幼木が育っている。



图 2-6 旧山崎家住宅庭園配置图